ボランティアのある心豊かな町づくり
ボランティア

広報 てんのう

No.299

昭和62年
3月25日発行

笑顔こぼれるまちに ボランティア

ひとつの出合いが感動を呼んだ（能代であいのコンサートから）

「あなた、ボランティアしてますか？」――どんな小さなことでもいいんです。相手に対し、自分が心を込めて、最高の力をだしきったなら――。

いつでも、どこでも、誰でも もっとボランティア

「ボランティア?自分の身ももて余しているのに…」――あなたの周りからこんな声が聞こえてきませんか。

高齢化や核家族化が進み、世の中不況風がピューピュー。でもこうした社会に生きるいまだからこそ、ボランティアなんですね。人と人とが心ふれあうことで思わずスキップを踏んでみたくなるような、そんなさわやかな「感動」をボランティアは、私たちの胸に運んできてくれそうなんです。

だからこそいつでも、どこでも、誰でももっとボランティア――。

子どもの夢を育てる――これもボランティア

ボランティアは 言葉をかけあうことから始まった

室　長　いま社会は、「モノ」から「心」の時代に移行しつつあります。豊かな人間関係を育てる源は、やはりこの「心」のあり方であり、それは、他人に対するちょっとした気づかいややさしさ、いたわりといったものから生まれてくるものだと思います。

こうしたことを踏まえ、今日はみなさんから〝ボランティア活動〟ということについてきたんのない声をお聞かせ願えればと思っています。

それでは、本日の進行をお願いしてあります社会教育指導員の仙北屋先生、よろしくお願いします。

司　会　一言でボランティアといいましても、非常に大事な問題を含んでいるように思います。まずみなさんから具体的にどういったボランティア活動に取り組んでいるのか、またこれがボランティア活動といえるのではないか、といったようなところからお話願いたいと思います。

桜庭慧子さん

桜　庭　数年前、私が民生委員をやっていた頃につくられたのが塩口ボランティアです。当時は、13人程のグループでした。その頃よくお年寄りの人たちから「最近のわげ者だば、行き会っても言葉かげね」といったような声があった事から、まず言葉をかけあうことから始めました。その次には、ほんのちょっとだったけれどもみんなで民謡踊りを覚え、塩口の老人クラブや玉の池荘などに慰問に歩きました。そんな声かけ運動が唯一のボランティア活動でした。

菅　生　中学校同期の気の合う仲間の集まりが、青年ボランティアとしていまも続いています。前は小学生を対象に指人形劇や映画を上映したり、青年会とタイアップして子どもたちとの冬期レクや一人暮らし老人の屋根の雪おろしなども行いました。毎年3月3日のひな祭りには、町内の各幼稚園・保育園に米ドンをつくって届けています。

司　会　子どもたちの反応はどうですか。

菅　生　急いで各施設に配って歩くものですから、実際の反応はよくわからないんです。喜んでくれているとは聞いていますが……。

三　浦　自分たち青年ボランティアの前身は、「親睦会」という同期のサークル的な仲間の集まりだったんです。20歳を過ぎて間もない頃だったんですが、朝5時頃に起きて、駅を掃除したり、道路沿いに花

ボランティア談義が続く

出　席　者（敬称略・順不同）

伊　藤　清一郎（民生児童委員総務）
畠　山　礼　蔵（大崎ボランティア）
浅　田　寿美子
（出戸新町ボランティア）
菅　生　修　一（青年ボランティア）
三　浦　龍　美（青年ボランティア）
安　田　鈴　江（天王町婦人会）
伊　藤　テツヱ（江川松葉会）
桜　庭　慧　子（塩口ボランティア）
仙北屋　清　一
（社会教育指導員：司会）
鈴　木　　清（企画室長）

を飾ったりしたものです。こうしたことを通じて、人と人とのふれあい、信頼関係ができあがってきたように思います。

伊　藤　私の方の松葉会というのは、何組かの夫婦でつくったグループなんです。最初の頃は、年もいってきたし時には旅行でも、ということであったんですよ。ある時に私が「還歴というのは世間に恩返しするという意味もあると聞いている」といったことから、江川バイパスの安全世帯に花を植えようということに決まったんです。ところが範囲も広いし、金もない、なんとしたものかと思っていたところハウスにまいた種からたくさんの苗が生えてくれたんです。さっそくみんなで草をとり、その苗を植えました。きれいな花を咲かせましてね、それが。去年たまたま大臣賞に輝きまして、町長さんに「賞をいただくなんて夢にも思わなかった」といったら「夢にも思わなかったからもらったんだ」といわれたのが記憶に残っています。

たまに負担だなあって
思うこともあるんですよ

安田鈴江さん

安　田　私は昭和52年に婦人会に入ったんですが、その当時から婦人会では演芸をもって老人ホームの慰問を続けていました。61年度に入ってからいつまでも演芸でも、ということで勤労奉仕を活動の中に取り入れています。老人ホームでおしめをたたんだり、掃除をしたりというようなものです。

また〝愛の古切手運動〟も展開中で開発途上国の福祉事業にも力を入れています。今年は2万枚を超しています。

浅　田　私の方の出戸新町ボランティアというのは、最初は12人程いました。日曜日ごとの本の貸し出しをしているのですが、会員が一人減り、二人減りして現在は本当に少ないです。たまに負担だな、と思う時もありますが、でもやっぱり地域の方や子どもたちがやってくると思うとその負担も消えて足が向いてしまいます。会長さんが民生委員の方で、その方たちといっしょにやっています。始めてから8年になり、町公民館に図書室があった頃からのものです。いまは本当に図書室らしくなりました。多く借りるときで20冊ぐらい出ますね。

伊藤テツヱさん

畠　山　大崎ボランティアが発足したのは、53年の頃です。当時は一人暮らしや老人世帯の暮らしを守るというのがねらいでした。やはり声かけ運動が主体な訳です。この大崎地区でも地域の人たちから協力をもらって一人暮らし老人のネットワークづくりを進めています。

最近の話ですが、夜に電話をかけても通じないというお

ばあさんがいましてね。訪ねていって聞いてみたら「さっぱり電話こね」というんですよ。耳が遠くなったんです。さっそく電話局に連絡して枕もとに配線を引っぱってもらいました。そんな訳で、やはり周りの人たちの目くばり、心くばりが大切なんですよね。

ボランティア登録会員は160人・14団体

司　会　ネットワークづくりが進んでいるというお話でしたが、今度はこうした情報を全町的にもっていらっしゃる民生委員総務の伊藤さんの方からお話を伺いたいと思います。

伊　藤　53年に天王町ボランティアというものが地域に組織されました。現在町内には14のボランティア組織があり、登録されている会員は160人程いるのでは……。保険をかけているのがですね。

さらには社協の働きかけで民生委員を中心にしたネットワークづくりが行われています。一人暮らし老人の人たちを10人程のチーム編成で地域周辺の人たちが始終目を向けていくというものです。このネットワークづくりに力を入れすぎてボランティア活動が下火になった時期がひと頃ありました。そこで年一回必ずこうしたボランティアの人ちとの意見の交換をする機会を設けるようにしています。講師の話を聞いたり、映写会をやったり、というようにこうした機会を通じてボランティアについて学ぶ訳です。

伊藤清一郎さん

みんながそれなりに一生懸命なのになかなか目に見えない状態にあるようにも思います。

司　会　160人のボランティア保険に加入している方がいるということでした。天王町の人口約19、000人からみればけっして多い数字ではないかもしれません。しかし、目に見えないけれどもかすかに、わが町でもボランティア活動は動いているということだけはお互いに理解できたのではないかと思います。

そこでさらに課題を堀り下げ、その上で「ボランティアとは何か」といった面でお話を出してみてください。

聾唖者との垣根を越えて

涙・涙のコンサート

三　浦　自分の地域がよくなければ住むに値しない町ということになります。

昨年聾唖者の〝であいのコンサート〟が能代でありました。自分たちは聾唖者と交わることもなかったし、ましてや手話なんかもやったことがない。町でも手話を覚える機会はない訳です。ところがどうしてもこのコンサートにいっしょにいってもらわなければならない聾唖者の若い夫婦が天王にいました。というのは、この夫婦の寄り添って生きる姿が歌になって紹介されるというのです。歌詞をつくったのは同じ地域に住む婦人の方でした。自分たちはその夫婦の家を訪ね、この事を伝えるのに四苦八苦。やっとの思いで身障者にありがちな心の垣根を取り払い、いっしょにいくことの了解を得たのです。当日は子どもたちも来てくれました。それにこの夫婦の両親もいました。曲が演奏され、手話を通じてその曲の歌詞が伝わったのでしょう。あとはもう涙、涙、涙……。この夫婦が帰り際にこういったんです。「本当に楽しかった。またこういう機会があったら教えてください」って――。

三浦龍美さん

自分はこの言葉の中に真のボランティアの心があると思っています。この天王町にはもっと聾唖者がいるんです。こうした人たちへの対応を考えることは、明日の日の自分を考えることでもあると思うんです。しみじみと伝わってきた、こうした感情をこれからのボランティア活動に生かしていきたいと思っています。

司　会　こうした大きな町には、これから手話や点字グループなどもまた必要なのではということですね。本気になって厚みのあるボランティア活動をするには、行政との連携がなければならないという意見がでていますが……。

畠　山　社協の拠点となるものが天王町にはない。「ボランティア活動をしたいんだが、どこに連絡をとったらいいのか」といったような事もある訳です。やはり法人化して組織を明確に打ち出す必要があるのではと思っています。

浅　田　私の方では、町の図書館ができたら閉じようという話もあったんです。でも「おばさん、ここで遊んでもいい」ってくる子どもたちがいるんです。もっと小さい子どもさんは読み書きに一生懸命。自分ながらに楽しくなるんですね。それで本の貸し出しは「出戸は出戸なりにいきたいな」なんて思っています。でも会員がもっと多くなれば

……。これが悩みですね。

司　会　さきほどからのお話では、どのグループも会員が少なくなっているとのことですが、これはなぜでしょうね。

本当の人間らしい純真さがそこにあった

畠　山　登録されていないボランティアも相当あると思います。○○○生活学級とか○○同好会といったようなものです。みんな自分たちの行きやすい楽しいところにいっている訳です。またボランティアを受ける側で嫌う一方通行的な押しつけのボランティアになっていないか、反省してみることも必要ですね。

自分は〝ふりむかない人をどうふりむかせるかがボランティア〟だと考えています。

桜　庭　まずいろんな気苦労をしょいこむリーダー自身がしっかりしなければいけないと思います。それから施設の訪問でもその施設によって反応も様々ということを認識することが大切だと思います。お年寄りのいる施設ではそれなりに喜びを表現してくれます。でも重度の身障の施設にいったときは全く反応を示さない訳です。まるで人形でも拍手をしている様なもんなんです。それでいっしょにいった人が「俺がだ何のためにこごさ来たのか。おめがて連れでこられだあだや」といった状況に何回かなりました。それが精薄の玉の池荘にいった時でした。「わあ、じょじだ。テレビの人と同じだじゃー」といったんです。そしてその人たちが今度は歌ったんです。それこそ一生懸命。一人で歌えない人は二人で……。そんな姿に今度は私たちが感動したんです。本当の人間らしい純真な姿に考えさせられたんです。

菅生修一さん

菅　生　昔は夏休みなり、冬休みに道路掃除をしたものなんですが、いまはやっていません。やらないということは道路に空き缶を投げてもいい、汚してもいいということにつながる訳です。小・中学生を対象にして月に一回ぐらい掃除する日をつくるべきだと思います。

また、先ほども出ていましたがボランティアの柱となるものがない訳です。ボランティア活動をやりたいけれどもどこにいったらよいかわからないですからね。

三　浦　自分たちが米ドンをつくっている間にも、これに手伝ってくれる地域の人たちが何人かいます。なぜスッと入ってこれるかというと、やはりみんなが和気あいあいにやっているからだと思うんです。「ボランティアというのはそんなに固苦しいものではないんだ」――そんなイメージをまずつくることが大切なんです。ですから天王町の各ボランティアが常時連絡、情報交換をできるような体制にしておく必要があるように思いますね。そして何か大きなイベントをやるとなったら、みんなが力をあわせて取り組んでいけるようにしていくことです。

私はこの天王町で〝でありのコンサート〟を一回やりたいと思っていますが、手話でも点字でもやれる人がいない訳です。このことはとりもなおさずボランティアの窓口が狭いと思うんです。

企業・団体の民間ボランティアに期待

司　会　青年ボランティアからは、わが町のボランティアの受け皿を広げることでもっとボランティアをやる人が結集するのでは、ということですね。もう一つは、少年・少女の頃から社会参加活動を大いにやらせてその目を育てていかなければ、ということでした。

いろいろな課題を抱えている訳ですが、さらに天王町のボランティアを振興させるためにどんな手をうっていったらいいものか、またたくさんの人にボランティアに目を向けてもらい自ら励んでもらうためにどんな手だてがあるものかということになりますね。

まず全県のボランティア研修でもボランティアの有償、無償について2日間を要して討議した経偉があります。

経費の念出についてお話を出してみてください。

浅　田　本を借りにいくにしても婦人会の人二、三人をお願いしていますが、昼食代とかは出してもらっています。

畠　山　私は、ボランティアは無償がいいと思います。やはりお金を与えられてボランティアをやるとなると、それ相応のワクがはめられてくると思います。それで常に思うんですが、企業・団体がこの天王町にもあるので行政から仲立ちをしてもらって物資での応援があれば大変しあわせだなあと思います。

畠山礼蔵さん

三　浦　青年ボランティアでは月2回の積み立てが会活動に使われています。

畠　山　前にボランティアの研修にいったとき能代のボランティアでは、資金をかせぐために町内の地図をつくって会社などに売っているとのことでした。

人に喜こんでもらって自分もうれしかったね

司　会　みなさんからのお話をお聞きしてますと、やはりボランティアは、公費に依存すべきではないとの見解のようです。あくまでも地域社会の中で輪を広げていって、そうした中に経費の念出をつくるべきといった話でした。

そこで一つ、青年ボランティアの出合いのコンサートでは相手も感動し、それに自分も感動を受けたというお話がありました。また子どもたちが本を借りにきて一生懸命みたり、遊んでいる様子に非常に感動をうけたというようなお話でした。つまりボランティア活動をして相手が喜こんでくれることで自分自身もまた得がたい体験をした。この辺のところにもう少し話をつっこんでほしいと思います。

浅田寿美子さん

伊　藤　私なりに一つのボランティアじゃないかなと思っているのは、読書会の会員募集にお茶を飲みながら部落の中を回ったんです。そうしたらいつのまに10人の会員が増えたんです。出たくってもきっかけがなかった訳ですよね。

「誘ってくれてよかった」って、人に喜んでもらって自分もそれでもっとうれしくなるんですから。

司　会　最後にボランティアとは何か、ということを拡大してもっともっと全体のものにしていきたいと思います。

浅　田　子どもたちが成長して中学に入りますよね。中学校の便りなんかをみた時に、読書感想文やスポーツの成績と名前がのってますとうれしくてね。「この子はやっぱりがんばっているんだって」―。

仙北屋清一さん

桜　庭　私はよくいま地域の方と花を生けているんです。そこには何があるかというと、花を生けることで心がなごむし、目的に自分でできるものを地域の人といっしょになってやりたいという気持があるんです。

司　会　ボランティアというと日本の場合は、とかく社会福祉的な発想の中でとらえられてきた訳ですよね。ところが最近のボランティア活動は、ボランティア自身のためにあるといわれていますよね。それは先ほどからお話するように、ボランティアをやって自分自身が感動する直面にあう。これがボランティアの本当の姿なのではないかといわれています。

自分自身の生きがいを再発見

そうしますと公費をつぎこんでボランティアをするのとは、根本的に違うのではないかということになりますね。そして私たちのいうところのボランティアというのは、もっとつめていえば、自分自身が何か手ごたえをつかんで生きたいということだろうと思うんです。

自分自身の行動を通して、それを社会に対してでもいいし、あるいは恵まれない人たちに対してでもいいし、何か手ごたえのある自分自身の手ごたえのためにしている仕事なんだ、つまり自分の生きがいをそこに再発見する活動なんですね。これからのボランティア活動ではないかと思うんです。

鈴木清企画室長

このことは、みなさんの発言の中に「本当に喜んでもらってこちらも感動した」という、この一語に全部表われているように感じました。

室　長　ボランティアは自分自身の生きがい、手ごたえをつかむことにその本質があるとのまとめでした。そうしますと「自分の身も余しているのに、人のことなんか……」という発想とは、真向から対立することになります。

「感動」――それは、「心」のこもった自分自身の行動そのものから生まれるということのように受けとりました。みなさんのご活躍を一層期待し、この座談会を閉じさせていただきます。

ありがとうございました。

広報てんのう　昭和62年3月25日号（毎月1回発行）通巻第299号　発行／天王町役場（南秋田郡天王町天王字上江川47―100）☎秋田(78)局2211～4番　編集・企画室　印刷／秋田協同印刷KK